

学 界 展 望 (哲学)

三 浦 秀 一
安 永 知 晃
齋 藤 智 寛
尾 崎 順 一 郎
佐 々 木 聡
南 部 英 彦
高 野 淳 一
山 田 俊
手 代 木 有 児

学界展望

●哲学

はじめに

学界展望各部門の作成は、本年度から学会員個人に委託される形式をとる。組織の枠に縛られない自由な展望が期待されるだろう。ただし本欄（哲学部門）は、前集同様、東北大学文学研究科中国思想研究室の教員（三浦秀一・齋藤智寛・尾崎順一郎）が全体のとりまとめを担当した。作業の継続性を重視したわけだが、昨年と較べてより多くの専門家に執筆を依頼した点に、いささかの変化がある。以下、2018年に日本国内で刊行された関連の著書・論文を対象に展望を述べる。各項目の執筆責任者は、はじめに・総記・近世が三浦、出土文字資料が安永知晃（関西学院大学大学院研究員）、古代中世が齋藤、日本漢学が尾崎であり、そのなかに、佐々木聡（金沢学院大学）、南部英彦（山口大学）、高野淳一（岩手県立大学盛岡短期大学部）、山田俊（熊本県立大学）、手代木有児（福島大学）の各氏による単行本の論評を載せる（登場順）。近代は割愛。論著の選択は各責任者独自の判断にもとづく。作業の過程に編んだ論著リストは、17年のそれに引き続き本研究室のHPに掲載の予定である。

一、総記

総記ではその内容が特定の時代や地域に限定しにくい著書を取り上げる。個性の際立つ共同研究の成果報告書が上梓された点に、今年の特徴がうかがえる。

東洋文庫現代中国研究資料室ジェンダー資料研究班の班員を中心とする小浜正子・下倉渉・佐々木愛・高嶋航・江上幸子編『中国ジェンダー史研究入門』（京大出版会）は、殷周から現代までの「ジェンダー秩序」の変容を多角的に検討し、「歴史研究におけるジェンダーの主流化」を遠望する。内なる偏見や思い込みの剔出をねらうその射程には、歴史研究に止まらず思想や文学・語学の研究も含まれるだろう。本書中、たとえば佐々木愛「伝統家族イデオロギーと朱子学」は、婦人の貞節に関わる程頤や朱熹の言説が、明清期、女性を抑圧する方向に歪曲化された事例をもとに、中国家族法の原理に対する滋賀秀三の所説の再検討を要請する。

小路口聡を代表とする科研費グループは、王畿・龍溪会語の訳注を軸にした研究と、王畿による講学活動関連の現地調査とを遂行してきた。同編『語り合う〈良知〉たち 王龍溪の良知心学と講学活動』（研文出版）はそうした現代版「講会」の成果であり、班員の論考とともに、銭明や呉震、申緒略など献身的な協力を惜しまなかった中国人研究者による論考の和訳や調査報告（担当は伊香賀隆と播本崇史）も載る。小路口「王龍溪の良知心学と講学活動—嘉靖三十六年の「新安福田の会」を中心に」は、交流の記念に寄贈された安徽省博物館蔵・新安理学先覚会言の「会語」等を活用し、通行の王畿集だけでは知り得なかった諸事情を解明する。手厚いもてなしに対する真摯な返礼と見た。

秋岡英行・垣内智之・加藤千恵『煉丹術の世界 不老不死への道』（大修館書店）は密度の濃い共同作業の佳品。「煉丹術入門」と「煉丹術の経典を読む」との二部に分かれるその「入門」には煉丹術の基本概念、歴史、原理に関する解説が並び、「経典」には練られた現代語の抄訳を添えてその概要が示される。紹介される「経典」は、周易参同契・抱朴子・老子中経・靈宝畢法・入葉鏡・悟真篇・丹房須知・金丹大要・性命主旨・女丹合編に加えて、丹房須知が拠った参同録の計11点である。外丹と内丹との錯綜した相互交流の軌跡がうかがえる入念な選択とその構成であり、煉丹術の歴史が明瞭かつ斬新なかたちで示される。

小島毅編・東アジア海域叢書15『中世日本の王権と禅・宋学』（汲古書院）は、小島が率いた特定領域研究「寧波プロジェクト」の課題研究「東アジア三国の正史に見る王権理論の比較」研究班の班員を核にした論文集。山内弘一「朝鮮王朝建国神話の創出」が、高麗史纂輯の背景に朝鮮王朝による易姓革命正当化の論理が存していたことを説く以外、本書に「正史」を扱う論考は見られないが、東アジア各地に重層的なかたちで存立していた「王権」の政治史的・思想史的分析が「中国・朝鮮の近世王権」、「鎌倉時代の王権」、「禅僧と儒者の王権論」の三部に分けて行われるように、禅僧の活動に注目した王権論の可能性が示される。中国・朝鮮・日本の仏教史について同一の時代を並行横断的に叙述する末木文美土編『仏教の歴史2 東アジア』（山川出版社）も一種の共同研究であり、上記両著はその広い視点を共通させる。

組織的な共同研究体制のもとでの独立した個人による知の競演が、中砂明德「明末の天主教漢籍と日本のキリシタン版」、矢木毅「漢籍購入の旅一朝鮮後期知識人たちの中国旅行記をひもとく」、宮紀子「モンゴル時代の書物の道」よりなる京大人文研附属東アジア人文情報学研究センター編『漢籍の遙かな旅路 出版・流通・収蔵の諸相』（研文出版）。図版やコラムも賑やかだが、その編輯を専門のエディターに任せたらより魅力を増しただろう。時空を自由に往来して文物を紹介する中砂論文は明清天主教研究に対する詳細な手引きでもあり、モンゴル時代研究の遂行において諸言語の習得活用、諸学問分野の糾合が「必須」と説き、かつそれを具体的に実証する宮論文は、本年の収穫でもある宮の大著『モンゴル時代の「知」の東西』上下（名大出版会）に挑戦する場合、併読をすすめたくなる一文でもある。

川原秀城『数と易の中国思想史 術数学とは何か』（勉誠出版）は、川原の既発表論文をもとに、「合理性を高めながら合理を超えて、時には超経験的命題をあわせ追求」する「術数的思考」にもとづく「曆算と占術からなる数の学術」としての術数学の歴史をたどる。三部構成のその「原論」では術数学の基本構造理解を示し、「専論」では数の合理性と神秘性とを表裏一体に開示する南宋秦九韶の「数学」、張行成と祝泌（ともに南宋）から明人黄畿へと展開される皇極經世書の歴史、精密な数理科学書であると同時に河図洛書にその理論の根源を置く康熙帝・御製律曆淵源の内容を分析する。稀少性の高い近世術数学研究でもある。「補論」では孫子の学問や中国医学などと術数的思考との関連性を論じる。

二、出土文字資料

最初に、佐藤信弥『中国古代史研究の最前線』（星海社）。一般向けの概説書で、夏・殷から前漢武帝期頃までの基礎的知識とともに、甲骨文発見以来の中国古代史研究の歴史を明快に叙述する。「出土文献と伝世文献との間」「歴史学と考古学との間」「骨董簡（＝非発掘簡）」を三本柱としたというが、これらは現在の学界で共有される問題意識でもあるだろう。以下、主に①甲骨文・金文、②簡帛資料を用いた研究の順に紹介する。

①甲骨文・金文を主に用いた研究

林巳奈夫『中国古代車馬研究』（臨川書店）は、林が1980年代に出版を準備した自選論集を岡村秀典の編集のもと出版したものである。殷・西周時代の青銅器に表された図象記号や関連の甲骨文をもとに当該期の社会関係を論じた第二章「殷周時代の図象記号」などを収める。収録論文の初出は半世紀以上前だが、岡村が述べるように、考古資料と文献資料を総合した林の研究手法は、古代史研究が考古学と歴史学とに分化された現在、ますます重要になったように思われる。谷秀樹「西周代姓考」（『立命館文学』659）は、金文に現れる「姓」の数量的分析・分類から、西周期の姓の消長には周王朝の通婚政策が関わっていたと結論づける。

②簡帛資料を主に用いた研究

角谷常子により『古代文化』（70-3）で「木簡研究の最前線と新展開」の特輯が組まれた。森和（戦国簡）、土口史記（秦簡）、青木俊介（西北漢簡）が、考古発掘を経ていない非発掘簡の性格をめぐる研究、簡牘の移動と土地の関係に注目した研究、簡牘の製作・使用・移動・保管・再利用・廃棄を切り離すことのできない一連の過程とした上で簡牘のライフサイクルを把握しようとする「生態的研究」などを紹介する。

谷中信一編『中国出土資料の多角的な研究』（汲古書院）は、非発掘簡の資料価値を確かなものとする方法を探る。大西克也「「非発掘簡」を扱うために」は、資料の性質を判断する指標として、出土簡牘に生じる化学変化や用字などを提示する。また、丹羽崇史「考古学研究からみた非発掘簡—商周青銅器研究との対比を中心に」は、発掘調査を経ない商周青銅器の真贋識別法を紹介し非発掘簡への応用を目指すとともに、真贋識別法の向上に伴い、偽作品側のノウハウ・製作技法も進展してしまう苦悩も述べる。このほか出土資料から伝世文献を再評価する論文などを収録する。

清華簡研究。谷中信一「清華簡『命訓』の思想と成立について」（『東洋文化』98）は、齊の方言を含む『逸周書』命訓篇を、適宜文章を改めつつ楚文字で抄写したのが清華簡『命訓』と見る。小寺敦「清華簡『鄭武夫人規孺子』に関する初步的考察」（同）は、当該篇は楚地で編纂あるいは修正されたとし、そこに記される東周を支える鄭国の混乱は、楚の中原進出のために必要な「史実」とする。

伝世の『老子』五千言と郭店楚簡『老子』二千言の関係に関する研究。前者が後者に先行し、郭店楚簡『太一生水』などの諸篇は前者の影響を受けて作成されたとした上で、「道家」とされる黄老思想の原理を論じたのが王中江（吉田薫訳）『簡帛文献からみる初期道家思想の新展開』（東京堂出版）である。逆に谷中信一「郭店『老子』二千言は

何を語るか」(『斯文』133)は、後者が『太一生水』などの思想を取り込んで体系的理論として完成したのが前者であるとする。

日書研究。海老根量介「戦国期楚における「日書」の利用について」(『東洋文化』98)によれば、原始「日書」は簡潔かつ抽象的な内容で、巫・祝・史などに独占される占卜の専門的知識を必要とするものであり、それに具体的かつ豊富な説明(説文)を付したマニュアルが九店楚簡『日書』であるという。

漢代の簡帛を用いた研究。草野友子「北大漢簡『周馴』の思想史的研究—『詩』の引用を中心に」(『漢字学研究』6)は、『周馴』を黄老文献と見なす従来の見解に疑問を呈し、当該篇の『詩』の引用方法が儒家のそれであることを指摘する。湯浅邦弘「時令説の展開—北京大学竹簡『陰陽家言』、銀雀山漢墓竹簡「陰陽時令・占候之類」を中心として」(同)によれば、『陰陽家言』など当該資料に見える時令説は為政者の不善に応じて災いが段階的に起こるとするもので、こうした時令説は漢代初期の典型的時令説とは異なり、むしろ後の董仲舒の災異説とつながる可能性があるという。水野卓「『春秋事語』に見える君主の称謂」(『資料学の方法を探る』17)は、馬王堆帛書『春秋事語』の資料的性格を考察する。

三、古代中世

まず秦以前の思想に関わる原典及び研究書の翻訳を紹介したい。金谷治訳『墨子』(中公クラシックス)は1978年初版の再刊で、末永高康の解説を附す。町谷美夫訳『李斯の生涯から見た秦王朝の興亡』(ミヤオビパブリッシング)は、馮友蘭『中国哲学史』の英訳者としても知られるDerk Bodde, *China's First Unifier, A Study of the Ch'in Dynasty as Seen in the Life of Li Ssu*, 1967を日本語訳したもの。

『日本中国学会報』70(以下『学会報』と略記する)には経学に関する精緻かつ清新な論考が並んだ。末永高康「『儀礼』における礼の儀節の分岐について」は、礼のプレイヤー・器具・場所の付加・不在・変更などによる礼の儀節の分岐を『儀礼』の記述中にたどり、礼学の展開をうかがう。早川泉「『京氏易伝』八宮構造の継承」は、副題の通り「『周易集解』を中心に」虞翻らによる京氏易継承の状況を考察し、虞翻らは飛伏説の一面にのみに注目して京房の規則には違背しており、鈴木由次郎・朱伯昆による飛伏理解の混乱はこうした『集解』の状況が一因であろうと指摘する。藤田衛「『荀爽九家集注』の注釈と卦象」は佚文を手がかりに、『九家易』は荀爽注を基礎に据えた易注であり、所引の諸家の注をさらに注釈する場合も存在することを解明。合わせて、『九家易』の提示する新たな卦象の淵源が費氏易にあることが指摘される。

秋山陽一郎『劉向本戦国策の文献学的研究 二劉校書研究序説』(朋友書店)は、劉向の校定を経た書物にはそれ以前に定本化していた「団塊的著作群」が保存されているとの予測のもとに、劉向『序録』に言う『戦国策』の藍本「国別者八篇」に相当する部分を現行『戦国策』から抽出する。古代の書籍や劉向校書に関する一般的状況への考察は説得力と示唆に富む。秋山著は劉向父子による校書の思想的背景として成帝期における周制回帰の流れを想定するが、南部英彦「劉歆の三統説・六芸観とその班固『漢書』

への影響—「天人の道」の分析を通して」（『山口大学教育学部研究論叢』67）は、「七略」を編纂した哀帝期、劉歆は「楽・詩・易・書・春秋」が「帝王の道」を示すとして「礼」に言及しなかったが、『周官』が学官に立てられた平帝期には六芸全体を「帝王の道」と捉えたと指摘し、その六芸観を発展的に論じる。「七略」を『荀子』より『漢書』に至る諸子統合の思想史の中で考察したのが、渡邊義浩「劉歆の「七略」と儒教一尊」（『東洋の思想と宗教』35）である。渡邊は、劉歆「七略」は諸子に「六経の補」としての意義を認めつつも儒教一尊を確立したものと論じ、南部同様、劉歆と『漢書』の継承関係を強調する。

術数学についての著書が二点刊行された。武田時昌『術数学の思考 交叉する科学と占術』（臨川書店）は、思想史上の諸事象を術数学の視点から捉え直した記述や、科学と迷信の二分法を相対化する問いを随所に挟み、刺激的な一冊となっている。第一部では陰陽五行説及びそれと並存していた六行の数理、物類相関説と精誠の哲学といった術数の基本的枠組みが解説され、第二部では儒家が自らの枠組みを解体し、災異説から讖緯説への変容を経て緯書の流行に至る「思想革命」として漢代思想史が叙述されている。

高橋あやの『張衡の天文学思想』（汲古書院）は、従来、天文学者として顕彰されてきた張衡の思想を多角的に検証した好著。張衡の著述は古代の科学と思想が錯綜し、文献学的にも扱いが難しいが、高橋は史料批判に基づき堅実な整理を進めている。特に本書前半で古代の宇宙論である渾天説の祖型を「渾」の持つ水のイメージで捉え直し、道家系の尚水思想へと結びつけてゆく点は重要な指摘である。一方、渾天説と天文観測儀器的発展史をいかに整合させるかという課題を残す。（高橋著の論評は佐々木聡担当）

渡部東一郎「荀悦の徳刑観の同時代における位置」（『米沢国語国文』47）は、荀悦『前漢紀』における徳刑併用の主張の根拠として『易』にもとづく「通」の論理があり、後漢末の現状にまず法治で対処し、次に徳刑併用から徳治に移行して太平へと引き上げる道筋が描かれていると考察。こうした荀悦や王符・仲長統らにおける法刑重視も、天人相関の枠内にあることに注意が促されてもいる。

齋木哲郎『後漢の儒学と『春秋』』（汲古書院）は、まず孔子と『春秋』経の関係を追求したのち、『穀梁伝』の成立過程と雲夢秦簡『編年記』の書法を考察して、戦国から秦漢に及ぶ春秋学の展開を跡づける。次いで『白虎通義』の今文学にもとづく『春秋』伝義に対して許慎は古文学の立場からの「異義」として『春秋』説義を提出し、何休との『春秋』論争において鄭玄は五経の全域から『春秋』積義を創出したと論じる。最後に桓譚・王充・王符・荀悦の論説文を、儒者自身の独創性に富む、論を用いた社会批判の春秋学の系譜として捉える。桓譚以来の批判哲学の系譜を、後漢における春秋学の二次的展開として捉え直した点で画期的な成果である。（齋木著の論評は南部英彦担当）

春秋学については野間文史『春秋左伝正義訳注』（明德出版社）第三・四冊、岩本憲司『春秋学用語集補編』（汲古書院）が刊行された。高橋康浩「魏晋の『国語』注について—王肅・孔晁注の検討」（『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』48）は、王・孔二氏の『国語』注佚文を検討し、特に孔晁注が『左伝』と『国語』を結びつける韋昭注を継承することを指摘する。

南澤良彦『中国明堂思想研究 王朝をささえるコスモロジー』（岩波書店）は、明堂の建築と祭祀について、経学上の問題が強く意識された漢より南北朝までの議論、儀礼の実用面や歴史上実在した明堂が考慮され始めた隋の諸説、経学・先例に拘泥しない唐代諸帝の態度が時代を追って論じられ、さらに宋元明清の儀礼と、医学・風水における明堂についてそれぞれ一章が設けられる。多様な言説が丁寧に分析されると同時に、正統性の象徴、天神と交流する装置といった明堂の本質が抽出されもしている。堅実なる快著と言えようか。

魏晋南北朝の思想。池田恭哉『南北朝時代の士大夫と社会』（研文出版）は、貴族制という固定的な枠組みでは南北朝士大夫の多様な精神は解明できず、また従来の思想史研究は南朝に偏っており北朝士大夫に独自の精神についても分析が必要である、と先行研究の問題を指摘する。この課題設定のもと、学問を媒介として自己と家、社会、国家を連続させるものとして顔之推の精神を描き出し、『劉子』を材料に北朝士大夫の仕官への強いこだわりを指摘する。『顔氏家訓』については、林田慎之助の全訳『顔氏家訓』（講談社学術文庫）、渡邊義浩主編『全訳顔氏家訓』（汲古書院）も刊行された。

趙ウニル「王弼の始終論」（『中国思想史研究』39）は、「母」としての「終」、「終に反る」といった表現に着目し、王弼の「終」とは「無→有」なる生成過程の「終」であったり、「終」から「始」への循環の起点であったりすると論じる。大上正美「阮籍・嵇康と隱者孫登—隱者を固有の他者とする表現への契機」（『二松学舎大学人文論叢』100）は、「目指すべき他者」としての隱者孫登の存在が、方外に出ることは出来なかった阮籍・嵇康の思想・表現の契機となったことを、阮籍・嵇康それぞれと孫登との出会いの逸話と、いくつかの作品の分析を通して描き出す。熊征「江淹の隱逸思想について—陶淵明との関わり」（『中国哲学』45・46）は、江淹は浮沈の激しい官界にあって隱逸への思慕を精神上の支えとしていたと論じる。同時代の孫登と向き合う阮籍・嵇康と、過去の隱者たちを思慕する江淹との違いは、両者の置かれた時代の違いであると同時に、大上、熊両氏の対象への接近姿勢の違いでもあろうか。

名和敏光「『抱朴子』所見呪語の遡及的考察」（『東方宗教』131）は、解釈に諸説あった『抱朴子』登涉篇の呪語について、出土簡帛の術数・養生書や秦漢の行政関連文書の用語法を考察し、従来の断句を正して新たな読みを提示する。謎めいた呪文でもさまざまな形式、ジャンルの文献を丁寧に考察することで意味を定める、その治学態度を模範としたい。孫瑾「『鬼交』と繋がる「注」病—『病源論』を中心として」（『東洋古典学研究』46）は、「鬼交」すなわち夢で鬼と交わることによる病の変容を考察する。漢代には伝染病の一種であった「注」が、六朝期には定義が拡大されて次第に原因がわからず治療できない病気の総称となり、隋唐の医書になると「鬼交」も「注」の症状の一つとされたという。

安藤信廣『聖武天皇宸翰『雑集』「周趙王集」研究』（汲古書院）は、北周の趙王宇文招の作品についての訳注と考察。「道会寺碑文」に北周宣帝を仏教復興の菩薩天子として位置づける意図を読み取り、「集」が筆写者聖武天皇の仏教理解および実践に与えた影響にまで説き及ぶ。「法身凝甚」文の対句や平仄を分析し、華麗な修辭により現実

の法会と浄土の世界を重ね合わせていることを指摘するなど、文学と宗教思想を総合的に考察する手法が注目される。以下、唐中期までは宗教思想の研究が中心となる。

伊藤隆壽『三論宗の基礎的研究』（大蔵出版）は、第一部で日本三論宗の系譜や典籍を、第二部で中国三論宗の典籍を、第三部で大須文庫所蔵の三論宗文献を取り上げ考証する。特に第二部では、まず慧均『大乘四論玄義記』を検討し、「有」や「無」に限定されない「中」から「有」「無」が「仮」に説かれるとする「初章中仮義」が三論の教義の核心だと指摘し、同書の百濟撰述説に説き及ぶ。次いで同書との関連から、従来吉蔵の撰述とされてきた『弥勒経遊意』『大品遊意』『大乘玄論』が吉蔵の撰述ではないことを、緻密な文献考証に基づいて論証する。現存する吉蔵の著作の分析を主に進められてきた三論教学の研究に見直しを迫り、日本、中国、朝鮮の交流の中で捉え直そうとする意欲的な著作である。（伊藤著の論評は高野淳一担当）

伊藤著は『道教義枢』感応義に『四論玄義』からの借用とみられる文の存在を指摘しており、三教交渉研究への貢献も大きい。その『道教義枢』や三教交渉の問題を含む著者の中世道教研究が集大成されたのが麥谷邦夫『六朝隋唐道教思想研究』（岩波書店）である。

道教教理に関する記述は多くの道典に散見するが、その全体像を体系的・総合的に提示していることは稀であり、多くは個別的記述に終始している。麥谷著は六朝から唐のこうした道教教理を、「道・氣・神」をキーワードに複合的・総合的に構築して提示するものである。通時的には先秦から唐代までの変遷を「理」をも射程に入れて論じ、共時的には儒仏道の三教交渉の中での思想深化の過程を探る。そして、具体的事象としては、空間としての「天界」、そこに住まう人の根源存在としての「真父母」、その人に対する救済論までを体系化し、そこに『老子想爾注』、唐・玄宗注釈、『道教義枢』といった重要文献を位置づける。六朝～唐の当事者ですらイメージし得なかったであろう道教教理の立体的世界を、本著は読者に展開してみせる。（麥谷著の論評は山田俊担当）

成瀬隆純『唐代浄土教史の研究』（法蔵館）は、隋の蒲州栖巖寺に始まり唐初の善導に至る浄土教史の諸問題を扱う。浄土教徒が『観無量寿経』の「五体投地」に特殊な解釈を加え、『観仏三昧経』を根拠として自撲懺悔を行っていたことを指摘する第二章は、成瀬も示唆するように偽経『占察経』や道教との関係もうかがえ興味深い。また従来は単に善導作とされてきた『観念法門』が、道綽より伝授された山西玄中寺の浄土教を善導がまとめた書物とするのも重要な仮説であろう。

成瀬著は『統高僧伝』に見られる「伝者重其陶鑿風神」「伝者親行其寺」という特徴的な表現を見逃さず、いくつかの伝に共通する情報提供者の存在を想定した。この「伝者」については、撰者・道宣の自称である可能性など再検討が必要だが、本文の定型表現に着目する方法が成功しているのが、船山徹「梁の宝唱『比丘尼伝』の定型表現—撰者問題解決のために」（『東方学』135）である。船山は、外的記録を根拠として宝唱撰に疑義が呈されることがあった『比丘尼伝』について、本文の検討により僧名、俗姓、卒年の表記法が宝唱『名僧伝』と共通することを確かめ、宝唱撰として問題無いことを論証する。倉本尚徳「碑文と『統高僧伝』諸本の比較研究—曇詢・僧邕伝を例として」

(『日本古写経研究所研究紀要』3)は、『統高僧伝』の撰者がもつづいた資料を推定し、版本時代に碑文を参照して本文が改められた場合があると指摘する。

東洋大学国際禅研究プロジェクトの主宰する『国際禅研究』創刊号が刊行された。楼正豪「新たに発見された新羅入唐求法僧・恵覚禅師の碑銘」は新羅出身の荷沢神会門人・恵覚の碑銘についての考察。通然「新出金沢文庫残欠本『破相論』の本文紹介、ならびに、日本・朝鮮所伝『観心論』(破相論)諸本対校」は題名通りの資料翻刻と考察。金沢文庫残欠本は五山版『達磨大師三論』の祖本であるという。伊吹敦「初期禅宗と『般若経』」は、両京進出前の「東山法門」において『般若経』は修行方法を記した經典とされたが、自らの悟りの正しさを基礎づけるために依用される段階を経て、南宗では「般若波羅蜜」の重視を基礎においた一種の信仰対象となったと論じる。なお渡辺章悟・高橋尚夫編『般若心経註釈集成〈中国・日本編〉』(起心書房)が刊行された。慈恩寺基、円測、法蔵、浄覚、慧忠らによる心経注が、それぞれの専門家により解説を付して現代語訳される。

戸崎哲彦『柳宗元 アジアのルソー』(山川出版社)はこれまで注目されなかった作品「貞符」に光を当て、王権の根拠を天意ではなく「生人」に置くのが柳の合理主義・無神論の目的だとした上で、柳の生涯と諸作品、思想を語る。戸崎によれば「生人」の重視は王叔文党の陸質(淳)や呂温ら陸学のスローガンでもあった。弭和順「邢昺『論語注疏』とその特色」(『学会報』)は、邢昺『論語注疏』における皇侃『論語義疏』や『五経正義』からの継承・批判関係を整理し、『注疏』の独自性を、『論語』各篇の命名とその順序の意味づけを全篇に徹底させたことに見出す。あわせて該書思想史的位置を推測するが、その推測から連想されるのは、中世から近世にかけての思想・學術の継承と発展という問題である。

四、近世(中国と朝鮮)

荒木見悟「『新版仏教と儒教』の執筆意図」(『九大・中国哲学論集』44)は近年発見の遺稿。2008年台湾で刊行された廖肇亨訳注『仏教与儒教』の「附録一」(連清吉訳)の、日本語版原稿である。解題的内容を持つ一文に「執筆意図」と題した荒木の意図を尊重したい。朱熹の思想体系が内包する禅仏教との厳しい緊張関係を強調するこの文章は、研究の方向性を規定する意図の意義について、改めて考えさせる。

中純夫編『『朱子語類』訳注 卷十六(上)』(汲古書院)が第15回配本の書物として刊行された。各種雑誌が掲載する『語類』および『語類』以外の原典の訳注稿の傾向は昨年と基本的に同様であり、その成果紹介は割愛する。

市來津由彦「朱熹における四書注釈の「説明」と実践知の所在」(『中国思想史研究』39)は、朱子学的言説を読み解く現場において直面し、かつ王学のそれと対峙する場合により顕著となる問題、すなわち、かれらによる「説明」の言葉を「近代」の「学知」によって把握する際に生じかねない「誤解」の構造化を目指す。原典の読解に苦心してきた著者のいわば方法序説であり、同「朱熹の跋文における「感情」の表象」(『国学院中国学会報』64)はその展開編。市來の視点は、田中秀樹「南宋における四書疏釈書の

登場とその要因―師説の継承と出版文化』（『史林』101-1）および川原秀城「豊穰な知の世界―退溪学成立前夜の朱子学をめぐって3」（『中国思想史研究』39）と対比させたい。田中は、経書が体現する「言外の意」を、しかし言葉によって捉えようとする朱熹追随者の欲求が南宋末以降の注釈書を生む原動力だと説き、川原は、「真の程朱学者とは、経書といえども絶対化しない、程朱の精神と原則をうけいれた者」と述べ、通常、陸王学者とされる盧守慎を「朝鮮朱子学史上、新たな地平を開拓」した学者と評価してその思想を分析する。中朝両朝の学術における歴史的な文脈の相違に関しては、中純夫「中国と朝鮮における朱熹に関する考証的研究」（『日本儒教学会報』2）が全般的に、同「韓元震と湖洛論争―人物之性同異論を中心に」（『韓国朝鮮文化研究』17）が十八世紀朝鮮の朱子学者韓元震を取り上げて論じる。

南宋前半の思想世界が育んだ幾多の可能性のなかには、朱熹がその思想体系に取り込まなかった要素も存在するだろう。かかる問題意識のもと土田健次郎「宋代湖南学の思想史的位置」（『東方学』135）は、胡安国やその子胡宏の学問を概観し、二程およびその後学との思想的共通性や思想的課題における朱熹のそれとの類似を指摘する。こうした試みの先には朱熹周辺の人士に対する思想史的再検討が待ち受ける。望月勇希「楊万里「心学論」とその道学思想」（『学会報』）は、張栻の父張浚に師事した楊万里の論著「心学論」を誠実に読み解き、聖人の言葉と「道」との関係や「道」を実現するための実践方法に関する楊の認識を再構成する。

従来の見解に対する再検討の動きは道教研究の分野が明快である。三浦國雄「『北斗本命延生経』傳洞真注初探」（『東方宗教』131）は、晩唐までには成立し北斗七星君ないし九星君への帰依を説く『北斗本命延生経』の傳洞真による注釈の特徴を析出し、南宋に流行した北斗信仰や天心正法などとの関連性を明確にすることで、南宋中期の道士としての傍証も存する傳洞真の活躍時期を確定させる。山田俊「金朝道教「真元派」再考」（『熊本県立大学文学部紀要』24）に言う「真元派」とは、『上方大洞真元妙経品』など一連の經典群の撰述母体であり、金元兩時代に活動したとされる道教の一派である。山田は、この經典群という觀念の成立が元代後半にまで降ることを緻密に考証し、「真元派」や関連諸経をめぐる従来の見解が支持しがたいことを示す。

西欧人にさきがけて十二平均律理論を發明した朱載堉の音楽思想を分析する田中有紀『中国の音楽思想 朱載堉と十二平均律』（東大出版会）は、朱が克服をはかった三分損益法に関する劉歆および朱熹・蔡元定の楽律論、朱載堉理論の内包や哲學・舞踏論といった外延、それらと同時代人の認識との異同、清人による批判的反應やその意味などを検討し、東西の平均律理論を比較する終章に至る。朱氏思想を伝統中国における経学の枠組みに位置づける方法論的自覚のもと示された模範的考察であり、近世思想研究に新たな一頁を開いた。朱載堉が嘉靖から万曆を生きた王府の子孫、すなわち出版文化の潮流に棹さしつつも科挙受験とは基本的に無縁な人士という点から推せば、本書の成果は同時代史研究へとも拡げうるが、比較文化史的研究という観点に立つならば、渡仏した中国人天主教徒が記した自国の学術を述懐する著作を読み解き、その「異国」体験が華夷觀念の相対化をも促した事例を紹介する新居洋子「『中国古代についてのエッセー』

(一七七六) 読解一第一部を中心に」(『東洋史研究』77-1)にも繋がる。天主教関連の研究として、王雯璐「漢訳教理問答『天主聖教啓蒙』の研究—明末天主教布教実態の—様相」(『中国 社会と文化』33)は『啓蒙』に関する基礎的調査を丁寧に行い、竹中淳「宣教師から見た「祭祀」—フランソワ・ノエル『中国哲学三論』「第二論文」を中心に」(『哲学・思想論叢』36)は、布教を通して鮮明になる自身の教義理解と中国伝統思想との異質性およびその解消法について論じる。

明代の研究全般が中後期のそれに偏ることには忸怩たる想いがあるものの、解明を待つ「事実」が潜んでいるのもその限定的領域であろう。ただしそうした「事実」の意味は、研究者各人の「意図」によって異なってくる。永富青地「胡宗憲本『陽明先生文録』および附録『伝習録』について」(『東洋の思想と宗教』35)は書誌学的新知見を発掘し、劉珉「最晩年の王陽明に見られる政治志向について」(『早大大学院文学研究科紀要』63)や岩本真利絵「管志道思想形成と政治的立場—万暦五年張居正奪情事件とその後」(『史林』101-3)は、文集所収の上奏文や実録などを活用して各思想家の政治家的側面に光を当て、薄井俊二「明代の地理家王士性について」(『埼玉大学紀要・教育学部』67-1)は屠隆や馮夢禎など万暦の文人との交友もある王士性の生涯と著作を、同「明代士人の龍脈説—風水説との関わりで」(『東方宗教』131)は堪輿家との関わりを紹介する。

周知の通り、政治・文化等の再生産システムとしての科挙という認識は、中国近世思想史研究上必須の包括的視座である。ただし明清鼎革を画期とした思想的展開の問題を解明するためには、混乱の時代を微分する繊細な手法もまた要請される。鶴成久章「万暦元年浙江郷試の策題について—王守仁の孔廟従祀と浙江王門」(『東洋古典学研究』45)は全体への目配りに優れ、王守仁の従祀に対する賛否両論の議論とその推移を、各地の郷試における策問や程策、試録序の読解によって跡づけ、この議論が持つ政治性・党派性をあぶりだす。一方、早坂俊廣「劉宗周に於ける意と知—史孝復との論争から」(同46)は、劉史両者が行った思想交流の深部に切り込む快作。陽明良知説を批判して「意は心の存するところ」と説いた劉宗周と余姚の王学者史孝復との往復書簡を分析し、王学との距離の取り方に揺らぐ晩年の劉宗周像を描出、劉の後継者を任じる黄宗羲の師説理解との異同を論じる。潘平格・陳確の思想にも触れる荒木龍太郎「明末清初期浙江人士の思想と心情—黄宗羲の観点を通して」(『活水論文集文学部編』61)は清初における黄の思想的関心を示し、新田元規「費密『弘道書』の「道統」「道脈」論」(『学会報』)は、清初の費密による『弘道書』の上巻から、帝王を主体とした統治の学問としての「道統」論を再構成し、修己する主体による治人の実践という宋代以来の士大夫の自己認識との相違を導く。佐藤鍊太郎「明清時代における陽明学批判—「無善無悪」説をめぐる論争」(『日本儒教学会報』2)は副題に言う「論争」の背景を探り、康熙帝による朱子学尊崇に及ぶ。

清代思想学術研究は精緻な文献解釈が特徴だが、その意義に関する自問の姿勢を堅持したい。廖娟「経と図—清代における経書の読解法について」(『日本儒教学会報』2)は清代前半の儒者胡煦の易図を解説し、廖明飛「韓元震『儀礼経伝通解補』について—

李氏朝鮮における朱熹『儀礼経伝通解』受容の一側面』（『東方学』135）は朝鮮の儒者韓元震の礼学を概観した上で、主に清代中期のそれとの比較を行う。吉田勉「廖平の今古学と『春秋穀梁伝』」（『学会報』）、同「廖平の『穀梁伝』解釈—その旧注批判と劉向説の引用をめぐる」（『中国哲学』45・46）は、清末廖平の初期思想を代表する『穀梁古義疏』やそれに先立つ『古今学考』により、廖が穀梁伝を純粋な今学と規定して公羊伝よりも優位に置いたその認識の形成過程を詳細にたどる。

最後に、小野泰教『清末中国の士大夫像の形成 郭嵩燾の模索と実践』（東大出版会）は、清末の初代英国公使として著名な郭嵩燾に関する本邦初の専著。主に郭の西洋認識に注目してきた先行研究に対し、進歩と保守、西洋近代と伝統儒学など研究者の研究枠組みに規定され、郭の主体的問題意識への十分な分析を欠くと批判する立場から、生涯にわたる郭の著述を検討し、初期の地方官期以来のあるべき士大夫像の模索こそ彼に一貫する問題意識であり、その西洋認識と経学・諸子学もこれに深く根差すことを解明した。清末の現実 に即した郭の実像理解からその西洋認識を捉え直す郭嵩燾研究の発展を示す労作。中国近代思想史研究への問題提起の書でもある。（小野著の論評は手代木有兎担当）

五、日本漢学

まずは文献の出版、伝承、受容に関連する論考から。通史的な考察として、永富青地「江戸期における『聖蹟図』の出版について」（『中国 社会と文化』33）は、孔子の生涯を絵入りで解説した聖蹟図の版本調査を行い、儒教の普及を促したその役割を指摘する。各論として、青木洋司「那波活所『重編四書註者考』について—明代学術との関係を中心として」（『国学院中国学会報』64）は、活所が当時最新の学術的成果である明代の著作を意識的に用いて『四書』注釈者の伝記を撰述したことを示す。武田祐樹「藤原惺窩と林羅山の交渉再考—『知新日録』受容を考慮に入れて」（『学会報』）は、羅山が、王学を容認する鄭維岳撰『四書知新日録』を見ていたことを踏まえ、惺窩との往復書簡における朱陸異同論を陸王学批判と捉える先行研究の克服をはかる一方、その『大学諺解』では朱子学の内に王学を包摂しようとの認識を示していたと説く。近代に渉るものとして、陳捷「邁宋書館銅版『西清古鑑』の出版について」（『中国古籍文化研究 稲畑耕一郎教授退休記念論集』東方書店）は、明治時代、乾隆勅撰の『西清古鑑』が銅版印刷技術を用いて出版された経緯や販売状況、当該銅版の行方などを論じる。

伊藤仁斎・東涯父子に関する研究では稿本や写本が積極的に利用された。2015年に逝去した丸谷晃一の研究が、荻生徂徠研究会によって『伊藤仁斎の古義学 稿本からみた形成過程と構造』（べりかん社）としてまとめられた。丸谷は、仁斎思想における個々の概念やその構造を綿密に分析する傍ら、成書時期の異なる稿本を利用し、仁斎が朱子学的思惟から脱却していく過程を跡づける。廖海華は伊藤東涯の易学に対する先行研究の『周易経伝通解』偏重を批判し、写本として伝えられた『周易伝義考異』の価値を示す。『考異』に関する文献学的な調査に加えて『通解』との関連性や東涯易学の方法論にも言及する「伊藤東涯の易学とその特色—『周易伝義考異』からみる」（『学会

報])、東涯の卦爻説の変化について旧説の見直しを試みる「伊藤東涯の卦爻説—その早年と晩年との差異」(『中国哲学』45・46)がある。阿部光磨「伊藤仁斎と陽明学—羅近溪との関係を中心に」(『日本儒教学会報』2)は、朱子学や禅学とともに陽明学を批判した仁斎の、その問題意識における近溪思想との構造的類似性を指摘し、宣芝秀「伊藤仁斎の学問観の再把握—〈性—道—教〉、〈意味—血脈〉、生生的「道統」論の体系」(『日本思想史研究』50)は、仁斎が、孔孟の間で受け継がれる道と実践的な規範との双方を日常的に実践することが道統に繋がる方途と考えていたことを述べる。

礼制の受容に関する研究としては、吾妻重二「荻生徂徠および伊藤東涯・東峯と儒教葬祭儀礼」(『東アジア文化交渉研究』11)が、同編『家礼文献集成 日本篇七』(関大出版部)に収録される徂徠・東涯・東峯らの喪礼関連資料により、彼らがともに当初は朱熹の『家礼』に関心を示しつつも、徂徠は次第に『家礼』とは異なる儀礼を構想するようになったのに対し、東涯・東峯は『家礼』に忠実であろうとしたことを論じる。松川雅信「近世後期における闇齋学派の思想史的位置—儒礼実践に注目して」(『日本思想史研究会会報』34)は、稲葉黙齋・中村習齋が寺請制度のもとでの儒仏混淆的な喪礼を構想し、かつ徂徠批判を意図してそれを「修己」の実践と位置づけていたことを指摘する。韓淑婷「佐久間象山における幕藩制的秩序観の一考察—『喪礼私説』の「成服」項に着目して」(『九州中国学会報』56)は、象山の服喪説が中国の尊卑貴賤の序列を明確にする五服制度だけでなく、江戸時代の家父長制をも視野に入れていたことを論じる。

最後に、教育の分野における漢学受容関連の研究として、伊藤大輔「寛政期朱子学者の教学思想の論理と意義—広島藩儒頼春水の主張」(『九州史学』178)は、春水が広島藩内の「朋党」争いを回避し、かつ藩の家風を重んじるために、藩の教学を朱子学に統一するよう主張したと述べ、殷曉星「近世日本の清聖論受容と民衆教化」(『歴史評論』824)は、備中・美作などで代官を務めた早川正紀の『久世条教』や福井藩公認の学塾・恵迪齋における「郷約」が、それぞれの地域の実情に応じながら民衆教化に関する清朝の勅諭を改変して用いたことを紹介する。湯城吉信「懷徳堂における漢作文実習」(『中国研究集刊』64)は、題名通りの事例を懷徳堂関係資料によって解説する。この資料には、日本の史談などを複数の人物が漢文で書き換えた文章が載る。なお懷徳堂研究会の研究成果が、既発表論文をもとに竹田健二編『懷徳堂研究 第二集』(汲古書院)としてまとめられた。

●文 学

はじめに

すでに周知されたように、従来、各大学の研究室単位で担当されてきた学界展望の執筆については、本年から大きな変更があった。ただし、依頼を受けた段階では研究室単位としてであった経緯もふまえ、本年は東京大学中国語中国文学研究室(代表:齋藤希史)の担当として、学内の関係教員による執筆ととりまとめを行った。